



ヘーゲルの 「ドイツ帝国」改革構想

—対仏同盟戦争の敗北がドイツに齎したもの—

(2)

早瀬 明

ヘーゲルが『ドイツ国制論』執筆に着手したと推定される1798年末乃至1799年初頭は、1797年10月17日締結のカンボ・フォルミオの和約を以て第一次対仏同盟戦争が終結した後、1799年2月28日に第二次対仏同盟戦争の戦端が開かれる迄、ラシュタットに於て戦後処理の交渉が行なわれた時期に相当する。最終的決着を見ない儘に解散せざるを得なかった此のラシュタット会議こそ、『ドイツ国制論』執筆の動機形成に深い関わりをもつ。

所で、フランス革命の勃発と共にドイツに於ても一部知識人の間で、革命フランスとの連帯の許で革命を遂行しようとする運動が生じた事は、周知の通りである。特にマインツに於ける共和主義運動は有名である。当時のヘーゲルも、実際的な政治活動に参加した訳ではないが、そうした政治運動に共感を覚えた知識人の一人であり、独自の思索に基づいて「ドイツに於ける革命」の可能性を追求していた。

そうした謂わば親フランス的なドイツ知識人にとって、ラシュタット会議は、ドイツ革命の支援者としての希望を託された革命フランスが領土的野心を秘めている事を暴露する場となった。蓋し、少なからぬドイツ知識人が歓呼の声を以て迎えた如上の和約、其が、実は、単なる革命勢力の勝利宣言などではなく、寧ろ、フランスの強かな領土要求を秘めていた。即ち、その秘密条項第一項に、パーゼルからアンデルナッハに至る、マインツ城塞とマンハイム橋頭堡を含む広大なライン左岸地域のフランスへの割譲が約されていた。ラシュタット会議は、その秘密条項を批准する場所なのであり、従って、その会議を通して、フランスの野心はドイツ人の広く知る所となった。(革命フランスの領土要求が、フランス絶対主義の自然国境説の復権に他ならない事は既に明白。)

ラシュタット会議に於ける一連の経緯がドイツ知識人の間に強いパトリオティズムを、而も最後のライヒスパトリオティズム(帝国愛国主義)を喚起した事は、最近漸く其詳細が知られ始めた所である。即ち、1795年4月5日にパーゼルに於てブランデンブルク＝プロイセンとフランスの間で締結された単独講和条約によって帝国解体が間近の事実として突き付けられた直後にも拘らず、様々な仕方でも帝国の再編を呼掛ける文書が、1798年頃から数年間に亘って、次々と世に現れて来る。それらの著者の中には、革命フランスの現実主義的政治によって革命への幻想を打ち砕かれライヒスパトリオティズムへと「転向」して行った者も少なくない。彼等は、革命を遂行してフランスの属国となるより、ドイツの自立を望んだのである。併し、弱小な領邦国家では大国フランスに対抗する術も無い事の明らかな彼等にとって、帝国は最後に頼みとする所である。客観的に見れば、既に瀕死状態の帝国に斯様な課題が過大なものである事は明白であるが、1803年2月25日の帝国代表者会議主要決議によって最後の望みが断たれるまで、そうした試みは陸続として現れてくる。勿論、ヘーゲルの『ドイツ国制論』もその一つである。

所で、斯様な企図には或る共通の特色が認められる。即ち、その関心が、帝国の統一的権力機構を如何にして再建するか、端的には、統一的な帝国軍を如何にして整備するか、と云う問題に向けられているのである。敗戦の主因がプロイセン軍の単独撤収に在る以上、これは現実に対応したものである。この意味では、ライヒスパトリオティズムの内実を帝国軍制改革の要求と規定する事も強ち不当とは言えない。そして、ヘーゲルの『ドイツ国制論』も例外ではない。帝国軍制改革の提案と云う性格が強い。併し、其に尽きない。そこには、権力の思想を見出そうとする国家哲学的意図も認められる。此等の点を次回を見る。

はやせ あきら (助教授・ドイツ哲学)